

## 細分課題2

# 遺 伝 相 談 面 接 技 術 の 水 準 向 上

愛媛大学

山 形 佳 伸

## 研 究 目 的

遺伝相談は細分課題4において大倉が述べているように、地域社会における窓口、遺伝相談施設における専門カウンセラーによる相談、そして長期にわたるアフター・ケアの三つの段階あるいは相から成り立ち、そのいずれにおいてもクライアントとの対話によってその目的が達せられるものである。

その中心にあるカウンセラーとクライアントとの面接による対話過程によって、遺伝相談の目的の大半、すなわち生殖行動の調節あるいは制限への意志の決定のための情報がクライアントに与えられ、意志の決定への方向づけがなされるのである。

遺伝相談においては、まずクライアントの当面する問題の科学的背景が明らかにされ、その事実をクライアントに理解させ、また遺伝的危険率の意味するところを十分に理解なっとくさせ、そしてそれぞれの条件のもとにおいてクライアントが意志を決定しうるようにあらゆる側面からの情報を提供するとはいうものの、クライアントの科学的知識の水準、理解能力、またそのおかれた家族的、社会的背景は千差万別であるため、科学的な条件がたとえ同じであっても、カウンセリングの進め方や説明の方法も千差万別ということになる。

また、遺伝という問題の故に、これに対する思想的な基本的な考え方あるいは情緒的対応もそれぞれに違うわけで、したがってカウンセラーの人柄や態度がクライアントの遺伝相談への対応の姿勢に影響を与えることもある。

遺伝相談の真の効果は、面接によって行なわれた相談の直後に現われるものではなく、長期にわたる経過を観察しなければならない。すなわち、決意されたとおりの行動が行なわれたか否かによる。これを確実に追跡することは非常に困難であり、ほとんど不可能に近いといわなければならない。

しかし、遺伝相談の需要は極めて多く、またその効果を高めることは常に必

要であり、このため遺伝相談の質的水準を維持し、さらにその向上を願うとなると、なんらかの方法でその効果を明らかにし、評価することによって、カウンセラーは自らの行なった遺伝相談のあり方、方法を検討し、反省し、改善の努力をしなければならない。

遺伝相談の面接技術の向上をはかるには、遺伝相談がクライアントによって十分に受入れられ、相談した価値があったと評価されたかどうか、もしそれが十分でなかったとすれば、その理由を知ることが前提となる。いわゆる遺伝相談の効果の判定に関しては、本研究班の細分課題1（分担研究者 竺原俊行）で検討されることになっているが、その結果は当然のことながら本研究（細分課題2）の基礎となるものである。

遺伝相談の効果の判定の一つの大きな問題は、いつの時点で評価し、判定するかということである。真の効果を知るには、場合によっては十数年、あるいは数十年を必要とする。しかし、面接技術の改善を行うには、このような長期観察の結果を待っていては、実行は不可能である。したがって、面接後比較的早い時期に面接の結果を知る必要がある。そして、クライアントは面接によっていかなる結論を導くことができたかを知り、遺伝相談の目的にかなうような効果をあげえたかを知ることである。

本研究においては、面接による一連の遺伝相談の過程を逐次分析することにより、そこにいかなる問題があり、それを満足させるにはいかなる科学的情報を必要とし、面接技術としていかなる点を配慮しなければならないか、また必要な改善はどのようにして可能になるかを検討することを目的とした。

前年度において、面接の効果の判定のために、面接の前後における変化、特にクライアントのもつ不安、抑圧の変化を心理テストによって知ることが一つの方法であることから、用いる心理テストについて調査した。本年度はそれらのうち、実際に用いるものの選定と予備的テストを行なうことを目的とした。

## 研究方法と結果

不安Anxiety, 敵意Hostility, 抑圧Depressionに関して、各種の心理テストの方法が発表されている。前年度において、Semantic Differential (SD)法, および Multiple Affect Adjective Check List

(MAACL)法の使用の可能性を指摘し、本年度にその検討を行なうこととした。

実際にこれらについて検討を行なったが、まず、Semantic Differential法においては、意味を与える刺激となる象徴語、および意味尺度としての形容詞対の選択が極めて重要なポイントになる。この方法はさまざまな対象や言葉に対して、一人一人の個人の抱く心理的な意味を測定するものであり、その前提は同一の言葉や対象が人びとにさまざまな意味を与えるということである。したがって、社会的に規定された万人共通の意味でなく、個人独特の意味を測定することになる。

また、遺伝相談では、個々の例で当面している問題が異なり、一定の意味尺度を用いるのでは、その尺度の数(形容詞対の数)を多くし、また刺激語の数を増加しても、遺伝相談の効果、特にその心理的效果の側面を同一水準で適確に個々の例を把握し、かつ比較することはかなり困難であると考えられるに至った。遺伝相談において、特定の疾患に関する場合と近親婚などの一般の問題に関する場合とではクライアントに与える刺激語が同一であっても当然反応は同じでない。また、遺伝相談では、遺伝的問題に関してのみでなく関連した問題についても当然触れることになり、遺伝的問題に関してだけの心理的な変化を知ることはできない場合も少なくない。また、それらをも含めて心理テストを行なうには刺激語をさらに増加させることになり、研究的には可能でも、実用的に用いるテスト方法としては利用しにくいと判断せざるをえなくなった。特に、遺伝相談の前後に行なうには、刺激語を15、意味尺度を15選んだとすると225のチェックを行なうことになり、時間的にも実際的ではないと考えられた。

次にMAACL法であるが、132のキーワードがABC順に配列された質問票に、被検者が一般的な、あるいはその日(時)の感じでチェックしてゆき、不安に対してはこのうち21語が、抑圧には40語が、敵意には28語が簡略法で用いられる。極めて簡単にスコアできるので、利用価値が高いと考えられる。しかし、英語の質問票を日本語に変えることは非常に困難な事であり、同等に用いる日本語の質問票の作成には、他の心理テストと比較しながら用語の選定を行なう必要がある。また、これを行なうには数年以上の日時を必要と

し、心理テスト、特にこの方面での専門家の協力をえなければならない。

一方、この方法に関する主としてアメリカでの研究、特に不安に関する心理テストについての成績の比較ということで文献的な調査を行なったところ、Minnesota Multiphasic Personality Inventory (MMPI)法がより効果的である部分のあることが指摘されていた。

MMPIは、妥当性尺度4、臨床尺度10を基礎尺度とし、550の簡単な質問に答え、その結果から人格特性パターンを求めようとするものである。MMPIの550の質問カードを被検者に「そう」「ちがう」「どちらでもない」に分類させるのであるが、いろいろの方法が短縮版も含めてあるが、いずれにせよ1回の調査に40分から1時間程度かかり、遺伝相談の前後にこれを行なうことはやはり不可能に近いと思われる。

MMPIのこの基礎尺度から、現在では特にある目的に対して設定された200種以上の追加尺度があるといわれ、Anxietyに関してだけでも7種類がある。このうちアメリカで近年頻繁に用いられているものにTaylor(1953)がMMPIから50項目を選んで作ったManifest Anxiety Scale(MAS)がある。わが国においても、この50項目に妥当性に関する15項目を加え、65項目から構成され、日本人を対象として標準化されたものが市販されている。テストの時間は5～10分程度であり、あらゆる意味から、本研究の目的に最も利用しやすい方法であるという結論に達した。

この結果にもとづき、実際に遺伝相談に利用する準備として、またコントロールを得る意味のもとに、妊婦を対象に、分娩後での心理テストを開始し、一方、近親婚の一般問題に関する相談の前後での心理テストを開始した。

MAS法を用いて、同一人である期間をおいての得点の変化は、精神科領域での治療効果の判定に用いられている報告はあるが、遺伝相談により不安が解消された場合に、果して同一人でanxiety scoreが変化するか否かの検討がなされなければならない。そこで今回は、妊婦を対象とし分娩前及び出産後5日目にMAS-testを行ない検討を加えた。

その結果を見ると、分娩後にscoreの低下する傾向がみられ、出産に伴う不安が正常児出産により解消されると考えられる心理的側面をscoreにより客観的に評価しうると考えられた。

次年度はこのMAS法により，クライアントの類型別（例えば病者，保因者，近親など）での不安度の差異，相談後の変化などの検討を行ない，遺伝相談面接技術向上の一助としたいと考えている。

↓ **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究目的

遺伝相談は細分課題 4 において大倉が述べているように、地域社会における窓口、遺伝相談施設における専門カウンセラーによる相談、そして長期にわたるアフター・ケアの三つの段階あるいは相から成り立ち、そのいずれにおいてもクライアントとの対話によってその目的が達せられるものである。

その中心にあるカウンセラーとクライアントとの面接による対話過程によって、遺伝相談の目的の大半、すなわち生殖行動の調節あるいは制限への意志の決定のための情報がクライアントに与えられ、意志の決定への方向づけがなされるのである。